

津久井やまゆり園の事件について

7月26日未明、神奈川県相模原市の障がい者支援施設において、入所者19人が殺害され、26人が重軽傷を負わされるという悲惨な事件が起きてしまいました。

戦後最悪と言われるこの事件に際し、全ての人が人間としての尊厳を有し、価値ある存在であり、平等であることを深く認識している私たち長野県社会福祉士会は、亡くなられた方々のご冥福をお祈りし、怪我をされた方々の1日も早い回復を心から願っております。

この事件は、障がい者に対する究極の人権侵害であり、虐待であり、生命の尊厳を冒瀆するものです。この行為を私たちは断じて許すことが出来ません。

福祉の担い手であったはずの男性がこのような事件を引き起したことについて、日本の福祉の脆弱さ・未成熟さを思わざるを得ません。とりわけ、男性が元職員であるという背景を考えると、労働環境や人材育成までも含めた、日本の福祉現場の危機的な状況が露呈したものとも捉えられます。

しかしながら私たちは、重度の重複障がいを持ちながら懸命に生きる人々のそばにいて、命の素晴らしさ、人間の尊厳の素晴らしさを深く認識しています。

障がい者を蔑視する考えは、心のバリア（差別意識）そのものであり、社会的障壁そのものです。人を人とも思わない考え方と行動は、障がい者だけでなく、社会的弱者に対するヘイトクライム（差別意識に基づく虐待行為）です。

殺害された19人の氏名について、ご遺族からの要望があって非公表となったとの報道がなされました。そこには、今なお障がい者に対する社会の差別、偏見に苦しむ家族の姿があり、まさに、障がいは社会の方にあると考えます。

「この子らを世の光に」と言った糸賀一雄先生のご思想は、重度の障がい者が社会の中心にいて、その人らしく生きられる社会こそが、誰もが幸せに暮らせる本当の豊かな社会であるというものです。半世紀前のこの思想も、先進国と言われる日本社会において未だ実現に至っていません。

私たち長野県社会福祉士会は、様々な関係機関・団体等と連携しながら、人間の尊厳を尊重するという意識を、社会の隅々まで浸透させ共有し、障がいがあっても差別されない共生社会の実現を目指して取り組みます。

平成28年7月29日

公益社団法人長野県社会福祉士会
会長 三村仁志